

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 117

学校名・団体名	御船町立御船中学校
HPアドレス	http://jh.higo.ed.jp/mifunejh/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	ユニバーサルデザインの視点に基づく指導方法の研究
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>本校では、昨年度から「授業のユニバーサルデザイン」に取り組み、「M・UD学習プラン」と名付けた独自の授業設計のための様式を開発し、生徒全員の学力向上を目指し、研究を深めてきた。今年度は、「授業UD」に関する著名な講師を招いての研修を行い、2月には研究発表会を開催し、講演・公開授業を実施した。研究発表会では、熊本県内だけでなく、九州全域に参加を呼びかけ、当日は参加者が250名にも達し、「授業UD」についての知見を広めることができた。</p>	

<活動・研究報告>

1 活動時期および内容

年間を通じて、「ユニバーサルデザインの視点に基づく指導方法の追究 ～M・UD学習プランに基づいた授業改革を通して～」という研究テーマのもと、全校で研修を進めてきた。

1学期は授業設計を中心に研修を進め、夏季休業日から2学期にかけて、個別の配慮や「学び合い」についての研修を進めた。3学期は研究発表会で全学級が公開授業を実施し、研究を深めた。講師を招いての校内研修は、7月（町予算の研究費で実施）と1月（本研究助成金により実施）に、研究発表会を2月に実施した。

2 研究報告

(1) 「M・UDスタンダード」による共通理解・共通実践

ユニバーサルデザイン(以下UD)の視点に基づき、「授業」「学級経営」「生徒指導」それぞれの共通実践項目を「M・UDスタンダード」として整理し、教育実践の基盤とした。これをもとに、定期的実践の振り返りを行えるようにしている。以下に「M・UDスタンダード」に基づいた具体的な実践内容を示す。

① 教室(学習)環境の整備

教室が安全で、落ち着ける場所であり、学びやすい学習環境であることは重要である。そのために学校全体の整理整頓を心がけ、心が落ち着く環境を整える。教室は、学びを妨げる余計な刺激を減らすことに配慮

し、教室前面に不必要な掲示物を貼らないようにし、カーテンを整備し生徒の集中を妨げないようにしている。

② 「やる気」を引き出す学級づくり(「クラス内の理解促進」「ルールの明確化」)

学級担任や教科担任は、つまずきやすい生徒だけではなく、すべての生徒が互いのことを理解し合い、助け合ってともに伸びてこうとする集団づくりを目指すことを年度当初の校内研修で学び、生活しやすい環境の整備や集団の育成を進めてきた。その際、発達障がいやその傾向がある生徒の特性について理解を深め、一人一人の生徒への適切な対応に基づく集団指導を工夫している。

御船中学校の授業者の基本姿勢は「和顔愛語」である。笑顔での授業を基本とし、生徒に安心感を与え、生徒と信頼関係を成立させることが、学習の場である教室が、安心感に満ちあふれた生徒にとっての安全基地となるための第一歩だと考えている。

(2) 「M・UD学習プラン」による授業改善

昨年度より本校独自の授業設計ツール「M・UD学習プラン」を開発し、後述の4本の柱を中心とした授業改革を進めてきた。今年度は、新しい学習指導要領が告示されたことを踏まえ、今後求められる資質・能力である「基礎的・汎用的能力」を育成する授業の在り方について更に研究を進めてきた。本校が目指すのは、全員が楽しく学びながら「分かる」「できる」授業である。「M・UD学習プラン」を「授業UD」を基盤とした「主体的・対話的で深い学び」の実現と捉え、研究を進めてきた。

全員が楽しく学び「分かる」「できる」を実現するためには「授業UD」は必要不可欠である。それに加え、「主体的・対話的な学び」を実現するために、基礎・基本の確実な定着に必要な不可欠な「リフレクション」と、教師のファシリテーションや思考ツールを活用した「学び合い」に注目した。

その内容を以下に示す。

① 「M・UD学習プラン」の4つの柱

- ・ねらいを絞り込み、具体的に生徒の変容した姿をイメージし「目標行動」を設定する。
- ・生徒の「分かる」「できる」を実現するために、生徒の視点から授業展開を考える。最初に、生徒のつまずきを想定し、生徒が学びやすい展開にするために、「視覚化」「焦点化」「共有化」を中心とした手立てを準備し授業に臨む。
- ・目標行動に到達させるための最も核心に迫る発問を主発問とし、課題解決に至るために焦点化された手立てを準備する。
- ・学習で知識や技能を獲得するまでの思考の過程を互いに分かち合う「共有化」で確実な定着を図る。

② 主体的・対話的な学びの視点による実践

今後、生徒に付けるべき重要な能力として「基礎的・汎用的能力」が挙げられ、「『分かった』『できた』ことを活用

御船中学校M・UDスタンダード(学級経営編)

安全配慮(安全)

- ① 学級が安全基地となるよう、生徒一人一人の心身ケアをする
- ② 生徒の訴えや相談を後回しにせず、即時・即策に対応する
- ③ 担任が目指す学級の姿を常に語り、明示する
- ④ 生徒一人一人に対して願いを持ち、常に期待の言葉をかける
- ⑤ 学級全体を見渡し、全生徒に確実に学級のルールを指導する
- ⑥ 賞罰等を明示し、常に一貫性をもって指導する

学級づくり(学級)

- ⑦ 組織づくり、役割・係等の決定に際しては、偶然性を排除する
- ⑧ リーダーを探すのではなく、生徒のやる気を喚起し、リーダーを育てる
- ⑨ リーダーを信頼し、スキルを丁寧に指導して任せる
- ⑩ 個々のよさを活かした一人一役を重視し、係や役割を行事と連動させる
- ⑪ 役割や仕事の進捗に、必ず適切に評価して、ねぎらいの言葉をかける

掃除・始業・終業(基本)

- ⑫ 常に全体に目を向け、指導は全体に対して行う
- ⑬ 生徒とともに無言清掃に取り組み、最後の用具片付けを徹底する
- ⑭ 給食は「効率・公平・楽しく」を実現するよう指導する
- ⑮ 生徒間で生徒間の給食のやりとりに配慮する
- ⑯ 給食時は、マナー指導を徹底し、最後まで座席を勝手に移動させない
- ⑰ 座席は担任(教科担当)の専任事項であることを周知徹底する
- ⑱ 学力バランス・個別状況など生徒理解に基づく、意図的な座席配置にする

朝の会(朝の会)

- ⑲ 会の中で、担任の思いを伝える場を設ける
- ⑳ 話し手の言葉を聴き止めに促し、集中して聞く習慣を育てる
- ㉑ 自由発言で相手意識を高め、扉を開かず発表する経験を積ませる
- ㉒ 配付物の持ち帰りを徹底し、提出物はそこで処理する

御船中学校M・UDスタンダード(生徒指導編)

教育的指導と人権教育

～「寛くして扱われ、厳しくして愛される」教師～

- ① 「和顔愛語(優しい表情と温かい言葉)」で生徒に接する
- ② 生徒を信頼し、一人一人の人権と人格を尊重する
- ③ 未然防止を前提、チームで情報を共有し、組織的に対応する
- ④ 「是は是、非は非」厳しさとともに、厳しさを対峙する

時を守り、礼をたたす

- ⑤ チャームは使わず、自ら時間を判断できる行動を指導する
- ⑥ 余裕のある登校を促し、「8:05」正門通過を徹底する
- ⑦ 授業・掃除・下校時等を厳守する習慣を定着させる
- ⑧ 生徒とともに無言清掃に取り組み
- ⑨ 挨拶は「自分から、大きな声で、互いの・3秒礼」を指導する
- ⑩ 無言活動では、無言で整然と入退場させ、全校の一体感を醸成する

授業への参加

- ⑪ 黙想とともに授業をたたく、全員の出席把握をする
- ⑫ 「船舶中式授業挨拶」の習慣化を図る
- ⑬ 座席を整理と並ばせ、必要な学習用具を机の上に準備させる
- ⑭ 穏やかな言葉や表情、温かい雰囲気を感じさせる
- ⑮ 個別に配慮が必要な生徒を念頭に「見えぬ支援」を行う
- ⑯ 座り方・聞き方・発言の仕方を統一する

言語環境の整備と言語習得の促進

- ⑰ 日頃から教師が丁寧な言葉で接する
- ⑱ 授業時には、生徒を呼び捨てにしない
- ⑲ 掲示物や通告・配布物、教材プリント等の表現に配慮する
- ⑳ 係や委員会での生徒の活動を認め、褒め・称揚する
- ㉑ 自発的・意図的な活動を促進させ、称揚する
- ㉒ 自治的活動の場を設け、社会性と責任感を育てる



できる能力」の育成が求められる。「M・UD学習プラン」では、「授業UD」を基本とし、「主体的・対話的な学び」を実現する授業づくりを目指している。UDの視点に基づいた「共有化」の場面や、自分を振り返る「リフレクション」の場面、定着を図る「教え合い」の場面などによって基礎・基本の定着を確実に図り、生徒の対話を仕組み「学び合い」を積極的に取り入れている。

- ・課題解決に向かう授業の山場と展開終盤の2カ所に生徒による「学び合い」を設定し、全員が理解できる授業展開を設計する。その「学び合い」を深めるために、思考スキルを選択したり、思考ツールを活用したりして、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した。
- ・授業の中でリフレクションの場面を教師が意識して設定し、生徒による学びの振り返り活動によって確かな定着を図る。
- ・生徒が発表する際は教室の外側へ移動する「8点発表」を推進する。生徒同士の練り上げで課題解決を促し、教師のファシリテーションによって「学び合い」を促進する。

③ 研究発表会で、著名な講師を招き、研鑽に励む

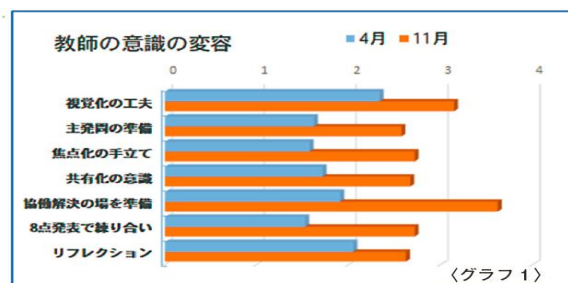
福岡教育大学 磯部准教授など「授業UD」に関する著名な講師を招いての研修を行った。2月17日に行った研究発表会では、筑波大学附属小学校・盛山先生を招聘し、中学校1年生の数学の公開授業を参観させていただき、生徒のつぶやきを逃がさず、生徒の思考で授業を深めていく「主体的な学び」の在り方について学んだ。また、日本授業UD学会の桂理事長、明星大学の小貫教授らによるシンポジウムで学びを深め、熊本大学菊池准教授による本校の研究に対する助言等をもらい研究の検証をすることができた。当日は、熊本県内はもとより、福岡県、鹿児島県、長崎県、遠くは鳥取県からも参加があり、貴重な意見を伺うことができ、学び多き一日となった。



3 成果と今後に向けて

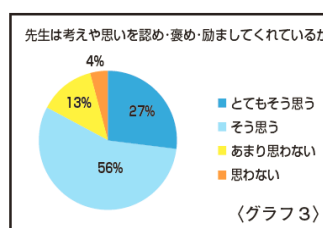
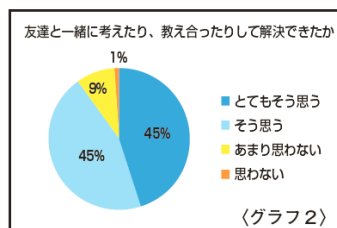
(1) 教職員の意識の変容 (グラフ1)

研究を始めた4月当初と11月を比較したとき、「視覚化の工夫」「焦点化の手立て」「協働解決の場を準備」「8点発表で練り合いをする」といった授業の工夫に関する項目全てで、教職員の意識が高まっていることが分かった。職員全体で「M・UD学習プラン」を基にした授業改善に真摯に向き合うことができた。



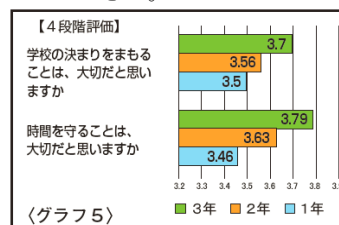
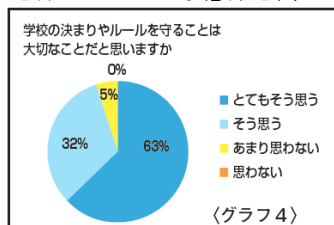
(2) 生徒の意識の変容

生徒へアンケートを実施し、研究の検証を行った。「友達と一緒に考えたり、教え合ったりして課題が解決できたか (グラフ2)」という設問に対し、90%の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した。教師の手立てによって「学び合い」を促進し、協働解決に取り組むことができた実感させることができた。「先生は考えや思いを認め・褒め・励ましてきているか (グラフ3)」という設問に対し、83%の生徒が肯定的な回答をした。「和顔愛語」という授業者の基本姿勢が生徒に伝わり始めている。この数値が今後も上昇できるよう、これからも研究の大事な視点として持ち続けたい。



この研究を通して、生徒が学習に対して主体的に取り組めるようになったかについて検証するために、次の調査に注目した。熊本県学力・学習状況調査の生徒質問紙調査の内容に、「あなたは勉強で分からない内容があったとき、先生や友達に聞いたり、調べたりするなど、理解できるように自分なりに努力をしていますか」という設問がある。現3年生の1年生時の調査結果では、「とてもそう思う」が27%だったのだが、3年生時では42%と大幅に上昇していた。(県平均は26%)「そう思う」という肯定的な意見まで含めれば87%に達した。また、「あなたは、授業で難しい内容を勉強したり、難しい問題に挑戦したりする時間をもっと増やしてほしいと思いますか」という設問に対して、「とてもそう思う」と回答した生徒が1年生時18%から、3年生では30%に上昇した。(県平均は17.6%)「学び合い」を中心とした授業改善により、生徒の課題解決に臨む主体的な姿勢と、学びを深めたいという意識を高めることができた。

生徒指導面でも、生徒の意識の変容を感じている。「学校のきまりやルールを守ることは大切だと思いますか (グラフ4)」という設問に対し、90%が肯定的な意見を持ち、「思わない」は0%だった。また、グラフ5を見れば分かる通り、「きまりを守る」「時間を守る」といった規範意識が、学年が上がるにつれて上昇している。生徒を信じ、称揚し、伸ばしていくという姿勢が生徒の意識の変容をもたらしたのではないかと分析している。



(3) 今後について

2年間の取組によって職員・生徒の意識は大きく変容し、落ち着いた学校になってきたものの、私たちが目指す学力にはまだまだ到達していない。今後に向けて、①家庭・地域を巻き込んだ学力向上(「コミュニティ・スクール」への移行)②教師のファシリテーション能力の向上、③「M・UDスタンダード」の確実な定着の3点を重点事項として挙げている。今後も研究を継続し、更なる課題意識を持って、授業改革と指導力向上を目指し、M・UDを進化させていきたい。